

令和 7 年 6 月 12 日現在

機関番号：11201

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2024

課題番号：20K13022

研究課題名（和文）満洲語文献による中国北方語音研究

研究課題名（英文）A Study of the North Chinese Phonetic System in the Manchu Language Documents

研究代表者

鋤田 智彦（SUKITA, Tomohiko）

岩手大学・人文社会科学部・教授

研究者番号：60816031

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では清朝の公用語の一つであった満洲語を記す満洲文字で書かれた漢字音を分析することにより、当時の中国北方語音の様子を明らかにした。実際に取り扱った資料は『満文三国志』『満文水滸伝』『満文西遊記』などの満洲語訳小説類、『清書対音協字』『音韻逢源』などの字音書類、『御製増訂清文鑑』などの辞典類などである。それぞれの資料に見える漢字音について個別に詳細な分析を加えるとともに各資料の対照を行い、小説類などでは字音書類、辞典類と比べ現実的な音の反映が強く見られた。その一方で字音書類、辞典類では規範意識に基づいた字音を見て取ることができた。それらを通じ近世中国語音の一端を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで中国北方語音研究において満洲語資料を用いた研究は行われてきたものの、その多くが個別的であり、それに対する全体的な研究はあまり行われてこなかった。それに対し本研究では清朝初期から清朝後期までの資料を幅広く扱い、個別の字音をそれぞれ取り上げ時代ごとの差異についても明示することができた。あわせてこれまであまりその実態が知られていなかった満洲語訳小説『満文水滸伝』『満文西遊記』についての研究を行うことができたのも一つの大きな成果である。また、北京で開催された研究会においてもその成果の一部を発表し、日本国内のみならず国際的な認知度を高めた。

研究成果の概要（英文）：In this study, we have analyzed the Manchu script, which was one of the official languages of the Qing Dynasty, to clarify the phonetic system of the northern Chinese language at that time. The materials actually handled include Chinese novels translated into Manchu, such as “Manwen Sanguozhi”, “Manwen Shuihuzhuan” and “Manwen Xiyouji”, as well as dictionary of pronunciation, such as “Qingshuyi yinxiezi” and “Yinyun fengyuan”, and dictionaries, such as “Yuzhi Zengding Qingwenjian” and others. The Chinese sounds in each of these documents were analyzed individually and in detail, and each letter sounds was compared with the others. The results show that the sounds in the novels strongly reflect realistic sounds, while the sounds in dictionary of pronunciation and dictionaries are based on a normative consciousness. Through these documents, we have presented some aspects of early modern Chinese sounds.

研究分野：中国語学

キーワード：満漢資料 言語接触 中国近世語音 満洲語 漢字音 満文三国志 音韻逢源 御製増訂清文鑑

## 1. 研究開始当初の背景

満洲資料を用いた研究そのものは主に清朝史と言った歴史学の方面からの取り組みが先行していた。例えば昭和12年(1937)に編纂され、長い間広く使われてきた『満和辞典』の編者である羽田亨は東洋史学者であり、実際に編纂に従事した人物には今西春秋、三田村泰助などの名が見られる。中国語音研究においてもやや遅れてその有用性が注目されるようになり、近年では表音文字である満洲文字で漢字音を記した点で北方語音を知るための重要な資料として欠かせないものであると認識されている。例えば、藤堂明保氏は近世漢語における論点である尖団音の合流について、『円音正考』を資料として論考を進めた(藤堂明保1960「ki-と tsi-の混同は18世紀に始まる」)。これ以降も、落合守和氏による『清文啓蒙』に示された漢字音表記(落合守和1989「翻字翻刻《兼満漢語満洲套話清文啓蒙》(乾隆26年,東洋文庫所蔵)」)や岸田文隆氏による『清字千字文』に対する一連の分析(岸田文隆1994「パリ国民図書館所蔵の満漢「千字文」について-1-」など)は、それぞれの資料に附せられた漢字音表記について研究したものである。他にも個別のテーマについては、やはり尖団音字の合流の過程について検討した山崎雅人1990「『満文]大清太祖武皇帝実録』の借用語表記から見た漢語の牙音・喉音の舌面音化について」などが挙げられる。また、研究代表者も、これまであまり注目されてこなかった満洲語訳された白話小説類について、文章中から漢字音を示す語彙を抜き出し整理を行ってきた。鋤田智彦2007「『満文金瓶梅』により帰納される漢字音の体系について」、鋤田智彦2015「『満文三国志』漢字音の基礎方言」などである。このように満洲資料を用いた中国語音研究はこれまでも行われてきた。満洲語は話し言葉としては次第に衰退していったが、清朝の公用語の一つであり、現在に至るまで各種の文字資料が豊富に存在している。そのような資料について、その多くは中国語音研究という観点からはほとんど手つかずの状態であるといっておく、それらを丁寧に読み解き当時の中国北方語の様子を知ることが中国本土資料のみからでは知り得ない結果を得ることにつながり、中国語音史研究の上で大変有意義である。

## 2. 研究の目的

本研究では第一義的に満洲文字で書かれた中国語音を分析することにより、清代北方語音の様子を明らかにすることを目的とした。また、これまで詳細についてはあまり知られていなかった個別の資料について、その特徴や性質を明らかにすることもその目的の一つであった。あわせて個別資料の漢字音を全体的に提示することで清代中国北方語音の研究の資料となり、その時代ごとの特徴が明らかになり、ゆくゆくは漢字音表記を資料の成立年代の手がかりの一つとして用いることができるようにする道筋をつけるものである。

## 3. 研究の方法

(1) 個別の資料について、どのように漢字音が満洲文字によって表記されているかを整理、分析した。具体的には以下の通りである。

a. 『清書対音協字』は17世紀後半に編纂された字音書である。当該資料ははじめに満洲字で字音を示し、その字音を持つ漢字を配列している。本資料は、これまで個別的な特徴については先行研究において取り上げられることはあったが全体的な分析は行われてこなかった。そこで本研究では書中に収録されたすべての漢字を対象とし声母、韻母についてそれぞれの特徴を明らかにした( )。あわせて全体的な漢字音の把握および他の資料との対比を容易にするため字音表を作成した( )。また、19世紀半ばに編纂された字音書『音韻逢源』について、先行研究を踏まえ字音表を作成した( )。

b. 『御製増訂清文鑑』は18世紀後半に編纂された辞書である。満洲語の語彙項目を立て、それを満洲語で説明するという体裁を基礎とし、項目に対応する漢語も掲出している。この漢語にはその発音を表す満洲文字が添えられており、これについては編纂当時の漢語音に対する認識が現れているものであると考えられる。aで挙げた字音書類とは異なり、同一の文字が複数現れているのが本資料の特徴であり、時に同じ漢字が複数の音で表されている場合がある。これらもやはり当時の字音認識を知る上でも貴重な手がかりとなる。これについて、同音字表を作成し複数の字音で示された字については容易に把握できるように工夫した( )。

(2) これまでその存在は知られていたものの、その実態がよく分かっていなかった資料について詳細な分析を加え、またそこに見られる漢字音についても明らかにした。

c. 『満文水滸伝』(大阪大学蔵本)は白話小説『水滸伝』を満洲語訳したもので、その存在は以前から指摘されていた。本研究ではこの資料について現存する第三回から第百回(最終回)までに現れる漢字音を表す満洲文字をつぶさに拾い上げ、その漢字音の特徴について明らかにした。あわせてその内容から底本の特定を試みた( )。同様に『満文西遊記』についても初歩的な分析を試みた( )。

## 4. 研究成果

(1) 個別資料に対する研究成果は以下の通りである。

『清書対音協字』に関する研究( )から、これまで知られていなかった本書の性格が明らかとなり、17世紀後半の資料として当時(康熙期)の北方語音の特徴が体系的に示された。同書に現れた特徴的な点には以下のものがある。1. 尖団音の区別がある。2. 果摂字と宕江摂入声由来字の開合が区別されない。3. 入声由来字の多くが現代北京語で言う文読音に対応する。4. 一部に呉方言の影響が見られる。

1については尖団音字の取り違えがないことから、合流が始まった後に人為的に区別したのではなく、現実に区別が行われていたことを示すものと考えられる。2については当時の北京音と異なり、南京音を反映したものと考えられる。3について、例えば「白」「北」などがいずれも be と表記され、明末の北京音を示す資料に見られる bai、bei に当たる音は見られない。4については、例えば「却」に対する kiya、「虐」に対する niya などである。これらは明末の呉方言を示す『中州全韻』などの資料にも同様な音が見られる。これについては編纂に携わった凌紹文が浙江仁和(現在の杭州市)の人物であったことに関係があると関連付けた。全体から南京音の特徴を示していることが明瞭となった。

『御製増訂清文鑑』については、18世紀後半の漢字音体系を明示するとともに『清書対音協字』における漢字音との対比を容易にするため字音表を作成した。そこに見られる漢字音の特徴としては、1. 尖団音の区別が人為的に行われる。2. 果摂字と宕江摂入声由来字の開合が区別される。3. 入声由来字に文白異読に通じる複数の音が見られるという点が挙げられる。1についてはほとんどがその由来に合致し漢字音が満洲字表記されるもの一部においてはその由来ではない表記も見られる。これは同時代の他の資料にも見られる現象であり、実際に区別がなくなりつつあるものを人為的に区別したものであると考えられる。2については、開合を -e と、合口を -o と示しており、北京語に共通する様子を見ることができ、3は例えば「北」に be のほか bai という音が見られたり、「薄」に bo の他に bao という音が見られたりするというものである。依然として文語音が優勢ながら、北京音に由来する白話音が広がりつつある様子を示していると考えられる。

あわせて19世紀半ばの『音韻逢源』についても同音字表を作成した( )。こちらの資料からはより北京語的な特徴が明確となる。一方で、当時は合流が進んでいた尖団音字をやはり人為的に区別するなど保守的な面を見ることができ、本書の特徴は、なんといっても他の満洲資料にほとんど記されることのない声調が明示されることである。特に入声由来字の声調を知るための資料として価値が高い。同音字表ではやはり複数の字音を持つ漢字について対比を容易にすべく表を作成した。

以上の三種類の資料を通して、三つの時期の北方語音を全般的に知ることができるようになったことは本研究における大きな成果の一つである。

(2) これまでほとんどその名前のほかにはわかっていなかった資料についての研究を進めた。具体的には『満文水滸伝』と『満文西遊記』である。

『満文水滸伝』についてはフランス国立図書館に抄本が所蔵されており、寺村政男氏による翻訳及び一連の研究がある。『満文水滸伝』は他に大阪大学図書館にも所蔵されており、本課題ではこちらの抄本についての研究を進めた。その結果、大阪大学蔵本はフランス国立図書館蔵本とは異なる系統のものであり、渡部薫太郎が『増訂満洲語図書目録』(1932)で取り上げた本であることが明らかとなった。また、その内容から現在広く通用している容與堂本を底本としたものではないことを示した。漢字音については「雍正十二年(1732)」序としながら、むしろ抄写が行われた乾隆五十年代(1780年代後期)の特徴が見られた。例えば、乾隆帝の諱である「弘曆」を避けるような表記が見られる。また、文中で見られる語の一部も同様であり、例えば「船」を表す語には雍正年間の他の資料には見られる cuwan という語が用いられず、乾隆年間から使われるようになった jahūdai という語が用いられている。以上のことから、雍正期の原本から抄写を行う際に漢字音や語彙の書き換えがあったことが伺える。

『満文西遊記』も同様に大阪大学図書館蔵本であり、渡部薫太郎『増訂満洲語図書目録』(1932)にその名が見えるのみで、具体的な内容についてはこれまで取り上げられてこなかった。本課題では『満文水滸伝』と同様に、現存する漢語諸版本とその内容を対比し初歩的な研究を行った。世徳堂本と李卓吾本とはいずれも共通する点と異なる点があり、少なくともどちらか一方に依ったということではないことが確認された。また『西遊真詮』と共通する箇所も見られ、現段階では底本の特定には至らなかったが、これは即ち清朝前期の『西遊記』流布の過程の一つの手がかりともなり得ることを示唆している。そして抄本の一部に康熙三十七年(1698)年に抄写したとの記述があり、『満文西遊記』における漢字音表記は同時期の『清書対音協字』との共通性が高い。一方で同一の漢字について複数の表記が見られることから、同時代的な漢字音の認識についての資料の一つでもあると考えられる。例えば「人」が先に行われていた zin という表記にあわせて新しい表記と言える zen が見られる、といったものである。

以上のような資料において、そこに見られる漢字音表記は資料の年代特定の一助となることが明らかである。本課題を通して清朝期の北方語音の様子の一端が明らかになったことに加えて、今後さらに未知の資料に出会った際にその漢字音表記を手がかりに刊行あるいは抄写時期を判断することが容易になった。そのようなことから本課題による研究結果が果たす役割は大きいといえる。

- 鋤田智彦 2020、「『清書対音協字』における漢字音(1)」、『アルテスリベラレス』107：93-114  
鋤田智彦 2021a、「『清書対音協字』における漢字音(2)」、『アルテスリベラレス』108：13-34  
鋤田智彦 2021b、「『清書対音協字』における漢字音(3)」、『アルテスリベラレス』109：93-106  
鋤田智彦 2022a、「『音韻逢源』の漢字音」、『アルテスリベラレス』110：47-78  
鋤田智彦 2022b、「大阪大学蔵『満文水滸伝』について」、『中国文学研究』48：1-23  
鋤田智彦 2023a、「『御製増訂清文鑑』の漢字音」、『アルテスリベラレス』112：77-94  
鋤田智彦 2023b、「大阪大学蔵『満文西遊記』について」、『中国文学研究』49：1-17

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計12件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 9件）

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 50
2. 論文標題 『満文三國志』に見られる漢語由来語彙について	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 106-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 3
2. 論文標題 『満文三國志』におけるjiyangjiyun	5. 発行年 2025年
3. 雑誌名 清代言語接触研究	6. 最初と最後の頁 37-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 112
2. 論文標題 『御製増訂清文鑑』の漢字音	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 77-94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 49
2. 論文標題 大阪大学蔵『満文西遊記』について	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 113
2. 論文標題 大阪大学所蔵『満文西遊記』回目	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 159-177
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 110
2. 論文標題 『音韻逢源』の漢字音	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 47-78
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 48
2. 論文標題 大阪大学蔵『満文水滸伝』について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 中国文学研究	6. 最初と最後の頁 1-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 111
2. 論文標題 大阪大学所蔵『満文水滸伝』回目	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 45-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 108
2. 論文標題 『清書対音協字』における漢字音(2)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 13-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 109
2. 論文標題 『清書対音協字』における漢字音(3)	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 93-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 鋤田智彦	4. 巻 107
2. 論文標題 『清書対音協字』における漢字音(1)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アルテス リベラレス	6. 最初と最後の頁 93-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件(うち招待講演 0件/うち国際学会 2件)

1. 発表者名 鋤田智彦
2. 発表標題 『満文三國志』における漢語語彙の満洲語訳について
3. 学会等名 第15回国際訳学書学会国際学術会議(国際学会)
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 鋤田智彦
2. 発表標題 《御製増訂清文鑑》中のhergen “字”
3. 学会等名 出土文献與漢語發展史國際學術研討會（國際学会）
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------